

スポーツ推薦入学当事者が 「勉強ができない」と語る意味 —高等教育機関における課外活動の研究(10)—

The meaning that the university students who have entered by using admission the sports recommendation systems narrate "I'm not interested in study."

— Study of the extracurricular activities in institutions of higher educations 10 —

大東貢生・平田 毅・新矢昌昭・湯川宗紀・
富川 拓・全 炳 昊・長光太志・山 幸代

要 旨

この小論の目的は、スポーツ系課外活動が正課教育にどのような影響を与えるのかについて、課外活動を行うことを目的とした推薦入試入学当事者に対するインタビューから検討し分析を行うことにある。結果、成績や勉強に対する自己評価は低くその低さをスポーツに対する自己評価で補っていると考えられる。また課外活動と正課教育の関連はあまり語られない。しかし、現在の学びについては女性と男性で差があり、男性の方がより「自ら進んで学ぶ」ということに消極的な側面が見られる。

キーワード：課外活動，高等教育，教育効果，ジェンダー

1. はじめに

この小論の目的は、スポーツ系課外活動と正課教育の関連について、課外活動を行うことを目的とした推薦入試入学当事者に対するインタビューから検討し分析を行うことにある。現在、大学・短期大学(以下大学)などの高等教育機関において、課外活動は単位修得を目的とする正課教育活動と並び、学生の学びにおいて重要であると考えられている。こうした課外活動は従来クラブやサークル・同好会といった学生の自主的な活動と捉えられてきた。加えて、最近の

大学を取り巻く変化により地域連携や高大連携、企業との連携といった大学外と大学との連携、つまり社会との連携が大学の社会貢献として重要であるとされるようになり、そうした連携に学生を巻き込む形でインターンシップ、サービスラーニング、ボランティアが正課外で行われる状況にある。一連のこうした活動は単位履修と関係のない取り組みとして課外活動ととらえることができる。すなわち、今日の大学内で行われている課外活動とは「従来型課外活動」と「社会連携型課外活動」の二種類が混在し展開されていると言える(大東ほか2012:43)。

こうした課外活動も大学において行われてい

る以上、学生に何らかの形で肯定的な学修、あるいは効果・影響が必要とされるであろう。正課教育活動であれば大学設置基準等により厳密に単位取得の方法が決定されており教育効果も形式的には厳格に評価されている。対して、課外活動はどうであろうか。「従来型課外活動」は顧問などの形で教職員の指導がなされているとはいえ、学生の自主的な活動として学生任せの運営がなされており、課外活動で何を学んでいるのかについて客観的な評価があまりなされていないようである。また「社会連携型課外活動」も教職員の関与があいまいでありシステム化されたプログラムに基づいて行われているものは少なく、客観的な評価がなされているものは少ない。さらに課外活動と正課教育活動での学びが重要であるならば、相互の連携はどのような価値を創出しているのだろうか(大東ほか2012:43)。

こうした研究としては、課外活動自体に関する研究(細川2001, 森2001, 佐藤2007, 平井ほか2012)や課外活動を行うことを目的としたスポーツ推薦入学当事者に対する教育方法に関する研究(牧野2011, 藤野ほか2011)などが行われている。しかし、課外活動が正課教育にどのような影響を与えるかについては、ほとんど研究されていない。そのため、2011年6-8月にA大学のスポーツ推薦入学当事者15名に対する半構造化面接法によるインタビュー調査を行い、いくつかの分析を行った(全ほか2013, 長光2013, 折戸ほか2013, 新矢ほか2013, 富川ほか2013, 梅島・大東2013, 湯川ほか2013, 湯川2013)。以下では、梅島・大東(2013), 折戸ほか(2013)の議論を発展させ、性によって異なる学修状況の差異をジェンダーの観点から解釈を試みたい。

2. 当該課外活動で得られたこと

梅島・大東(2013)において、課外活動を通して得られたことをインタビュー結果から解釈を

行った。その結果、当時者たちは、①「指導者がいない」(アメフト部Cさん 3回生男性)ために「自ら進んで動くこと」ということを得た。この「自ら進んで動くこと」を行っている(梅島・大東 2013:186)。

第二に、「ライバルやけど仲良くしときたいですね」「ライバルが出来たり話し合える仲間が出来た」(陸上部Oさん4回生男性)と語るように「友人が得られた」,「年上の方なので剣道やってる時は「お疲れ様です(とか言います)」(剣道部Fさん 2回生男性)と語るように「礼儀作法が身についた」,「みんなの力を合わせて勝ったというのが一番実感出来る」(アメフト部Cさん 3回生男性)と語るように「協力して行うことの重要性を認識した」,「身も心も強くなれたなと思います」(陸上部Oさん 4回生男性)と語るように「体力, 忍耐力が身についた」といったことを獲得している(梅島・大東2013:186-188)。

第三に、活動のため「朝はめっちゃ早くて、夜は遅いみたい。ずっと学校にいる感じだったんで」(空手部Eさん 2回生男性)と語るように「人とは違った経験を得た」ということにつながる(梅島・大東2013:188)。

第四に、上記のようなことが得られたことで、当事者は「みんなで何かをやるとひとつのものになるという楽しさとか、明るく誰かを応援する事で自分も元気になるという楽しさとか。」(チアリーディング部Iさん 3回生女性)といった楽しさなどを課外活動で得ることで「学生生活が楽しくなった」(チアリーディング部Iさん 3回生女性)と語る。また普段の大学の課外活動だけではなく、「日曜日とか、試合がある日は、こどもの試合に引率とか」(柔道部Gさん 3回生女性)と語るように地域のこどもたちと一緒に活動を行う。さらにいろいろな世界をみて、「視野が広がった」と考える。「(他のスポーツよりも実力が一番ということが)いちばん顕著に出てると思います」(アメフト部

Dさん 3回生男性)と「実力が重要であることが分かった」という結果を得たと考えているようである(梅島・大東2013:188)。

まとめると、第一に当事者は「自ら進んで動くこと」すなわち自主性・主体性を獲得し、第二に「友人」「礼儀作法」「協力して行うことの重要性」「体力、忍耐力」、つまり友人・礼儀作法・協調性・体力忍耐力を得たと考えられる。これらは課外活動を行うことによって直接的に得られたものであると考えられる。一方こうした課外活動は第三に「人とは違った経験」すなわち特殊な経験の獲得につながり、それらが第四に楽しい学生生活・広い視野・実力社会という認識の獲得といったより広範な社会活動や社会に対する認識の獲得につながっているのではないかと考えられる(梅島・大東2013:188)。

一方、正課教育との関連については、課外活動で疲れているので「とにかくしんどいんで授業中は寝るものだ」と(空手部Eさん2回生男性)「後ろの方が眺めがいいから、正直後ろの方がともだちとしゃべれます」(剣道部Fさん2回生男性)、「目立ちたくないで後ろの方に座る」(陸上部Oさん4回生男性)「勉強に興味はない」(野球部Lさん3回生男性)などもあり、「部活動は勉強に役立っていない」「勉強も部活動に役立っていない」(アメフト部Dさん3回生男性)との意見が多く、課外活動と正課教育の関連は語りからはあまり見られない¹⁾。

3. 「あたまが悪い」という自己認識

大学や短期大学などの高等教育機関は、学修や研究をすることが目的である。その中ではスポーツ推薦入学当事者も学修や研究を行うことが求められている。湯川(2013)によれば、スポーツ推薦学者は自律的・主体的に進路を決定して入学してきてはいない。そのため、入学後スポーツ推薦入学当事者が、課外活動と大学の目的である学修や研究との間で葛藤を引き起こすこと

になる。このことについて折戸ほか(2013)は「勉強に関するアイデンティティ」の形成にスポーツ経験がどのように影響するのかを述べている。以下では、折戸らの分析を援用しつつ、性による語りの差異について考えたい。

入学前の成績や勉強に対する自己評価として、スポーツ推薦入学当事者は、「中学の時から学校の成績が悪かったので」「下から数えた方が早い」(野球部Mさん3回生男性)、「もともと頭が良くないんで」「勉強が、全然…できない」(野球部Lさん3回生男性)、「人並みの勉強といえますかね、できないと思ってます」(アイスホッケー部Aさん4回生男性)、「(成績は)すごく悪かったです」(柔道部Gさん3回生女性)と、女性・男性に関わらず「成績が悪い」「勉強ができない」という「あたまの悪さ」を語る(折戸ほか2013)。

また周囲からも「あたまが悪い」ことに対して「バカだからちょっと頑張れよみたいな」(剣道部Fさん2回生男性)、「柔道ばかりしてたんやから(勉強)できない」(柔道部Gさん3回生女性)、「他の人(一般学生)に比べるとやっぱりそんなに頭そんな良くないと思うんで」(アイスホッケー部Bさん2回生男性)、「たぶん(一般学生から)頭悪いな」と思われてる」(チアリーディング部Hさん3回生女性)と語り、周囲の人々からも「あたまの悪さ」を指摘されている(折戸ほか2013)。

対して、スポーツへの意識については「勉強ができない分、スポーツは得意なんで、唯一認められる」(チアリーディング部Hさん3回生女性)、「野球をやっていたからこそ高校にも大学にも行けたし」(野球部Mさん3回生男性)と、女性・男性に関わらず「スポーツが自分自身を認めてもらえるもの」と語り、スポーツが自己肯定感を高めるものとされている(折戸ほか2013)。このように学校内において成績(正課教育)でのマイナスの自己認識とスポーツ(課外活動)でのプラスの自己認識が女性・男性とも見

られるようである。

では、今後の学修・研究についてスポーツ推薦入学当事者はどのように語るのでしょうか。ここからは女性・男性の語りに着目して検討したい。スポーツ推薦入学当事者男性は以下のように語っている。

【アイスホッケー部Aさん4回生男性】

(大学の授業で興味がある授業はありますか?)

「興味の出る授業はそんなに無いんですけど、でも授業を受けて面白いなと感じる事は多々あります」

【アイスホッケー部Bさん4回生男性】

(大学の勉強には興味ある?)

「自分、社会は好きですよ、ジェンダー論も、面白いと思う講義、多いんで、」

【アメフト部Dさん3回生男性】

(勉強には興味は?)「あります」

(今特にこういう事を勉強していますというのは?)「そう言われると無いです」

【空手部Eさん2回生男性】

(勉強に興味ってある?)

「無いです。興味が無い事はもう全然ダメなんです。逆にこれをやってて滅茶苦茶自分が興味が沸いたらめっちゃ出来るんです。でも興味が無い事はやる気が出ない。」

(教室で聞いて面白いなと思ったのは?)

「無いです。なんで大学に来たのか分からないですよ。勉強しに来てるのにとりあえず行っとけみたいな」

【チアリーディング部Jさん4回生男性】

(勉強とかで興味があるものってありましたか?)

「それは…いや、ないですね、ほとんど」

(ないけど単位取らなあかんで、仕方なく授業出てるって感じ?)「はい。出てないのもありますけど」

【野球部Kさん3回生男性】

「ゼミは結構興味がある」

(そのゼミを選んだことに対してどう思ってます

か?)

「あ、なんか、周りの人とかみんな結構かしこいっていうか。みんな、けっこうその、大体のゼミで調べたいことを考えて入ってきてるんで、意見もしっかりして、ついていくの結構大変なんで。で、それが逆にいいかな、っていう。自分も頑張れる…」

【野球部Lさん3回生男性】

(興味がある科目はある?)「大学入ってからですか?特に無いです」

(ゼミって楽しい?)「全然楽しくないです。結構きついです」

(ゼミの発表はどうしているの?)

「発表もありますけど、それもグループにはなるんですけど、やってもらって自分1人1時間座ってるという感じです。」

このように、大学の授業に関して興味のなさが語られており、興味があったとしても、履修する前からの興味であったわけではなく、履修しているとたまたまおもしろかったと語られる。

これに対して、スポーツ推薦入学当事者女性は以下のように語っている。

【チアリーディング部Hさん3回生女性】

(興味の持てる科目というのはどんなのがありましたか?)

「心理系とか。保育の免許を今取ろうとしてるんですけど、保育の授業とかは自分の興味がある事なのですごい聞いてます」「はい、興味あります。保育の事がすごい好きです」

【チアリーディング部Iさん3回生女性】

(社会福祉という勉強に興味はありますか?)

「あるんですけど、それよりも私、ちょっと、歴史が好きで。なんで、今は、社福士を目指すのではなく地歴の一、教員免許を、取ることにしてて。」

このように、男性の語りと比較して、女性は大学の授業に対して興味を持ち、自ら進んで学

ぶ傾向があると考えられる。

まとめると、スポーツ推薦入学当事者の成績や勉強に対する自己評価は低く、その低さをスポーツに対する自己評価で補っていると考えられる。しかし、現在の学びについては女性と男性で差があり、男性の方がより自ら進んで学ぶということに消極的な側面が見られると考えられる。

4. まとめに代えて

大学の授業に対するスポーツ推薦入学当事者女性と男性の語りの違い、特に男性の方が「自ら進んで学ぼうとしない」ということはどのように解釈できるのであろうか。ひとつの解釈としてロバート・W・コンネルの男性性研究を援用したい。コンネルはジェンダー関係の構造として性別役割分業であるところの「労働」、暴力とイデオロギーの結合であるところの「権力」、性的な欲望の対象であるところの「カセクシス」の主要な構造を指摘している(Connell=森ほか1993:151-184)。そして性別的性格の形成を「労働」「権力」「カセクシス」構造から考察を行っている。「権力構造」において、企業で働く男たちの頂点に経営者や専門職がたち底辺に不熟練の肉体労働者がいる状況と、対比して肉体労働者の肉体的な勇敢者を中心に置く男らしさ崇拜の一方管理職あるいは事務労働者一般を軟弱ものとみなす性別的な侮辱があると言う。また「労働構造」においても、専門職主義という一つの男らしさの形の構築という議論を行っている(Connell=森ほか1993:261-264)。すなわち、専門職の男らしさと肉体的男らしさの対比がある。

スポーツ推薦入学当事者の男性が「自ら進んで学ぼうとしない」のは、「権力」という主要構造での、スポーツにおいて肉体を鍛えている男性たちにとって上位の「肉体的な男らしさ」と下位の勉強によって獲得する「専門職の男ら

しさ」が構築されているのではないだろうか。一方、「労働」という主要構造においても、スポーツのスキル獲得は「専門職主義という男らしさ」を伴っているのではなかろうか。故に「肉体=専門職主義という男らしさ」こそが、「権力」構造での「勉強=専門職の男らしさ」を下位に見ることで、より大学での学びに近寄りがたくさせていると考えることもできるのではないだろうか。

ここでの解釈は、A大学のスポーツ推薦入学当事者15名に対するインタビュー調査の結果に過ぎない。今後はインタビュー件数を増やし、さまざまな解釈の可能性について検討していきたいと思う。

注

- 1) 前述の梅島・大東(2013)論文では、当事者は、課外活動において得られたことと正課教育における関連性を肯定的に考えるとすれば、課外活動で得られたことを生かして、学修の進め方についても気づき、結果として授業で工夫したりするなど、自主性・主体性・協調性・忍耐力・広い視野などを正課教育にもあてはめることで、学びへの気付きが生み出されることが起こりうると推測することができるのではなかろうかとまとめた(梅島・大東2013:189-190)。しかし当事者の多くの語りでは課外活動と正課教育の双方向的な関連性はほとんど語られていない。

文 献

- 全炳昊・長光太志・大東貢生「運動部員の学校適応と中途脱落差に関する韓国の動向－高等教育機関における課外活動の研究Ⅴ－『佛大社会学』(37), 66-70.
- Connell, R. W., 1987, *Gender and Power: Society, the Person and Sexual Politics*, Polity Press=森重雄・菊池栄治・加藤隆雄・越智康司, 1993,『ジェンダーと権力－セクシュアリティの社会学－』三交社.
- 藤野良孝・岩崎大介・山本英弘, 2010,「スポーツ学生における社会的技量育成のための学習方略の検討:アチーブメントテストの特徴に着目して」『朝日大学経営論集』(24), 49-55.
- 平井博志・木内敦詞・中村友浩・浦井良太郎,

- 2012, 「大学期における課外活動の種類とライフスキルの関係」『大学体育学』(9), 117-125.
- 細川正義, 2001, 「充実したキャンパスライフ: 課外活動の役割と期待 (〈特集〉課外活動)」『大学と学生』(439), 14-20.
- 牧野眞貴, 2011, 「スポーツ推薦入学生クラスにおけるアクション・リサーチ-授業改善による学習姿勢の変化」『Kinki University English Journal』(7), 87-98.
- 森正夫, 2001, 「課外活動の現状と課題: サークル活動を中心に (〈特集〉課外活動)」『大学と学生』(439), 8-13.
- 長光太志, 2013, 「大学における課外活動と正課教育の連関性-高等教育機関における課外活動の研究Ⅵ-」『関西教育学年報』(37), 171-175.
- 折戸萌美・山幸代・高橋真人, 2013, 「スポーツ推薦入学者における入学前後のアイデンティティの変容-高等教育機関における課外活動の研究Ⅷ-」『関西教育学年報』(37), 181-185.
- 大東貢生・新矢昌昭・湯川宗紀・富川拓・長光太志・平田毅・山幸代, 2012, 「大学における体育・スポーツ系課外活動に関する研究の諸課題-高等教育機関における課外活動の研究Ⅰ-」『佛大社会学』(36), 43-51.
- 佐藤龍子, 2007, 「学生の自発性を促すキャリア教育と正課外活動」『京都大学高等教育研究』(13), 25-34.
- 新矢昌昭・富川拓・大東貢生, 2013, 「競技者のスポーツに対する意味付与-高等教育機関における課外活動の研究Ⅱ-」『佛大社会学』(37), 42-49.
- 富川拓・湯川宗紀・長光太志, 2013, 「スポーツ推薦入学当事者の語りにみる「体育系課外活動の指導者と顧問-高等教育機関における課外活動の研究Ⅳ-」」『佛大社会学』(37), 60-65.
- 梅島哲平・大東貢生, 2013, 「スポーツ推薦入学

当事者が語る「大学で学ぶこと」-高等教育機関における課外活動の研究Ⅸ-」『関西教育学年報』(37), 186-188.

- 湯川宗紀・新矢昌昭・全炳昊, 2013, 「スポーツ推薦入試制度とスポーツ推薦入学者の自律(立)性・主体性-高等教育機関における課外活動の研究Ⅲ-」『佛大社会学』(37), 50-59.
- 湯川宗紀, 2013, 「スポーツ推薦入学当事者の進路決定における主体性・意志決定-高等教育機関における課外活動の研究Ⅶ-」『関西教育学年報』(37), 176-186.

<追記>

この小論は平成24年度佛教大学特別研究助成の研究成果の一部である。この論考をまとめるに際して、大東ゼミ生である梅島哲平、折戸萌美、高橋真人に協力を頂いた。ここに感謝の念を表したい。

(おおつか たかお

佛教大学社会学部 准教授)

(ひらた たけし

九州情報大学経営情報学部 准教授)

(しんや まさあき

華頂短期大学歴史文化学科 准教授)

(ゆかわ むねき

佛教大学社会学部 兼任講師)

(とみかわ たく

聖泉大学人間学部 准教授)

(ちょん びょんほ

佛教大学社会学部 兼任講師)

(ながみつ たいし

佛教大学社会学部 兼任講師)

(やま さちよ

佛教大学 研究員)